

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023年
No. 142
2023年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2022報告①…………… 1	多様な性のゆくえ⑥…………… 9
SEE性教育アカデミー 2022報告②…………… 4	今月のブックガイド…………… 10
いつきの“ヒューマン・ピーイング”②…………… 8	JASEインフォメーション…………… 11

◎ SEE 性教育アカデミー 2022 報告①

性と対人関係について語る 安全な場づくり

～ SAR につなげるネットワーキングスキル～

はじめに

SEE (Sexuality Education & Empowerment) は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた 10 年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として 2018 年に開講した。これまで概ね年 2 回のペースでセミナーを開催してきた。

「SEE 性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn (何を学ぶかから、どう学ぶかへ) をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

2022 年 11 月 5 日(土曜日)に大阪公立大学 I-Site なんばの会場にて午前 10 時から午後 4 時 30 分まで行われた今回のセミナーは、2022 年 2 月に開催され



た「みんなで考えよう私たちの SAR プログラム」と同じく対面でのワークショップ形式で行われた。

SAR プログラムとは

SAR とは Sexual Attitude Reassessment のことで、性に関する教育や支援に関わる人が、性に関する自己の価値や態度と向き合い、再構築するための研修プログラムである。諸外国の代表的な性科学・性教育団体

において、その受講が「専門家認定」の条件にされているものである。このプログラムは、性に関する教育や支援に関わる人が、「性に関する自己の価値・態度」と向き合い、再構築するための研修である。

SEEは、参加募集のチラシに、次のように記している。

「性に対する内容は、不快さや不調、葛藤を生じさせるトリガーとなりうる刺激が含まれることが多い。だからこそ、性と対人関係を扱う支援者には、SARのような自己覚知を目的とした研修が必要であり、学び合いのための安全な場づくりや適切な課題を選定するスキルも研修を行う際には欠かせない資質となる。」

今回の「SEE 性教育アカデミー 2022」は、3部構成で行われた。

第1部 性と対人関係について語る安全な場づくり

第1部は、主催者挨拶の後、一人1分程度の講師、参加者の自己紹介が行われ、10時20分から12時までの100分間、前回のセミナーに引き続き藤岡淳子氏（大阪大学名誉教授）を講師に、「性と対人関係について語る安全な場づくり」をテーマにグループワークを行った。このワークショップについては、SEEの共同代表である野坂祐子氏が4ページ以降で詳しくレポートしているので、参照いただきたい。ここでは、参加者の声（文責・編集部）のみを紹介する。

- 性という日本人には少し抵抗が強い領域の話をするうえで、場が安全であるということはとても大事だと感じました。みんなで最初に象の絵を描くことで、場に対する緊張感や抵抗感がかなり下がったと感じました。物理的な環境に配慮するという視点は、自分はおろそかにしがちだったなと気づいたので、これからは意識していきたいです。自分は今、何をどう体験し、それをどう自覚しているか、という視点を持ち続けようとする姿勢を大事にしていきたいです。
- 象の絵は、気づきを促すには、参考になりました。性への初めの意識など、思い出すことすらなかったところまで、驚きの連続でした。
- 前回聞いたときは衝撃的すぎる内容だと感じましたが、今回は興味深く聴くことができました。

SARは仲間とともに様々な性のありように暴露されることで、これまで閉じられていた（自分自身の性に対する）扉が開かれてゆくプロセスなのかもしれない、と感じました。今回は驚きや抵抗は減っていましたし、興味深く感じるよう変わっている自分に気づきましたが、そういうのも一端なのかもしれないと思いました。

第2部 支援者への影響 ～性への支援や教育に関わるときに起こること～

昼食休憩（60分）の後、13時から「支援者への影響～性への支援や教育に関わるときに起こること～」をテーマに講義とワークショップが行われた。

講師は、臨床心理士・公認心理師で、性暴力・性虐待被害者等への心理療法が専門の吉田博美氏（駒澤大学学生支援センター常勤カウンセラー、SEE事務局長）と同じく臨床心理士・公認心理師で学校や児童福祉領域での性的問題等に関する臨床・研究を行っている児童相談所や刑務所での治療研究に関するスーパーバイザーの野坂祐子氏（大阪大学大学院人間科学研究科准教授、SEE共同代表）。

最初に吉田氏が、性暴力被害の支援を行っている立場から、トラウマ体験とその反応について話をされた。直後のトラウマ反応は当然の反応であり、共通の反応もあるが、人それぞれ反応が異なることを知ることが重要であるという。

トラウマ反応には、「恐怖と不安」「回避・感覚麻痺」「解離」「無力感」「自責感」「怒り・攻撃性」「孤独感」「不信感」「身体症状」等がある。大切なことは、見通しを持たせて、安心してもらうこと。トラウマ反応への適切な対応がなければ精神疾患を患い、生活に支障が出ることもあると、支援する立場にある者は自覚することが必要であると述べられた。

吉田氏の講義を受けるかたちで、野坂氏は、支援者として最も注意しなければならないのは、「助けて」「治したい」「教えたい」という自分の気持ちを優先し過ぎるために起こる「～であるべき」「～しなさい」という支配的態度、パターンリズムに陥ることであり、これを避けなければならないと強調された。

お二人の講義後、「なぜ、この仕事・活動をしよう

と思ったのか」をテーマにしたグループワークが行われた。第2部のセッションには、以下のような参加者の声が寄せられている。

- 人を変えようとする気持ちが、仕事のやりがいやモチベーションにしている自分がいることで、場違いな発言をたくさんしてしまったなあと感じています。凝り固まった考え方を壊す良い機会になりました。
- 支援者自身に起こる反応や症状に自覚的であることの大切さを感じました。仲間同士でお互いを気にかけてあげることが大事だと感じました。そのためにも、ふだんから風通しの良い関係性を築くことが欠かせないと改めて思いました。「なぜこの仕事をしようと思ったのか」は、もう少し時間があつたらまた違う深みがあつたかなと感じました。

第3部

SAR (Sexual Attitudes Reassessment) の解説と体験

10分間の休憩を挟んで、午後2時10分よりSEEの共同代表である東優子氏（大阪公立大学大学院人間社会システム科学研究科教授）が「性に対する態度をみなおす・再評価する再構築する研修について」と題して、SARの解説とご自分の体験について講義を行った。

東氏は、諸外国のSARに関係する研修の具体的な内容を紹介され、最後にハワイ大学のミルトン・ダイヤモンド教授の次のような言葉を引用した。

性に関して、ある種の感情や態度が伴わない「事実」は存在せず、感情や態度は、個人や社会の都合で「事実」さえも変色させてしまうことがある。

一般的な話題や社会的な傾向について話したり、教えたりすることの必要性がある一方で、一人一人の人間は「平均」と一致することもあれば、劇的に異なることもある。その人の問題を個別化することが重要である。



「何がどうである」「何がどうあるかもしれない」「何がどうあるべき」ということは、明確に区別して語らなければならないが、専門家の言説においても「事実」と「可能性・仮説」が常に明確に区別されているわけではない。「何がどうあるべき」(価値)については、常に意見が分かれ、流動的なものである。

第3部のセッションには、以下の参加者の声が寄せられている。

- どんなものにも驚かない自分になる。これは、知ったかぶりをするのとは違うので、動揺しない自分づくりとしては、大切だと感じました。
- 普段から自分自身の内側に起こることに気づきを向け続けたいとより一層感じるようになりました。性について語り合う場は、正直身の周りにはありません。だから性について、自分がどう感じどんな反応をするのかは、わかっていませんでした。率直にみんなでオープンに語れる場を作ってくださいありがとうございます。まずは支援者こそ、こういう体験をしてみることが大事なんだ、と強く感じています。

東氏の講義後、午後3時40分から午後4時30分まで、参加者16名全員のセミナーに対する感想が語られて終了した。6時間30分を超える研修会であったが、「一日中皆様の考え方や見方を語り合いながら、自分の考えも再構成できたと実感しています」という言葉が表しているように充実した一日であった。

今回の「SEE性教育アカデミー」は3月25日(土)に同志社大学今出川キャンパス(京都市)で開催される予定である(詳細は11ページを参照)。

◎ SEE 性教育アカデミー 2022 報告②

性と対人関係について語る 安全な場づくり

SEE 共同代表、大阪大学大学院准教授 野坂 祐子

ワークショップのねらい

性にまつわる教育や支援を行う実務家が自分自身の性に対する意識や態度を振り返る SAR プログラムの実施においては、プログラムの内容が妥当で効果的なものであることが求められるとともに、SAR 受講者が気づきを深められるような安全な場が不可欠である。実際に、これまで SEE が主催した SAR に関する研修においても、性について話し合うという「不慣れな」体験への戸惑いだけでなく、受講者自身の傷つきや信念に触れる「敏感な」内容への反応もみられ、さまざまな配慮の必要性を実感してきた。

性に関する内容に限ったことではないが、安全に語り合える場をつくる工夫は、SAR のみならず性教育を行ううえで欠かせない。さらに、健康的な関係性を育む包括的性教育を実施していくには、実務家自身が対等な関係性のなかで安全な対話を体験することが重要だと考えられる。

そこで、今回の SEE 主催の研修では、「性と対人関係について語る安全な場づくり」と題するワークショップを実施した。ファシリテーターを依頼した藤岡淳子氏は、一般社団法人もふもふネット代表理事として、性暴力に関する問題に取り組んでおり、加害行為のある人への治療教育や家族への支援等を行っている。個人への働きかけだけでなく、治療共同体 (Therapeutic Community: TC) と呼ばれる安全な関係性と回復の場づくりを専門としており、官民協働の刑務所である島根あさひ社会復帰促進センターでの TC の運営にも携わっている。2020 年に公開された映画『プリズン・サークル』(坂上香監督) で、同センターにおける TC の実際をご覧になった方もいるだろ



う。生活を共にしながら、責任を分かち合い、対話を通して回復を遂げていく TC で取り組まれるのが「サークル」という語り合いの場である。このサークル体験を通して、SAR や性教育のあり方を考えようというのが本研修の目的であった。

みんなで「象」を描いてみたら…?

ワークショップは、会場にて円座になった受講者に向けて、藤岡氏からサークルについて説明されることからスタートした。TC において、サークルとは「自分自身を語る場」である。サークルの形状は、「上もなければ、下もない。始まりもなければ、終わりもない」という理念を表し、「一人ひとりの体験に、唯一無二の価値がある」と考える。円座になったときに中央にできる空間は、「生命の泉」のようなものである。ここに一人ひとりの経験や思いを注ぎ込むことで「豊かな泉」になり、そこからそれぞれが必要とするものを持ち帰っていくというイメージが語られた。

今回の研修も、人とつながる場であり、性教育を広めていきたいと願う人たちが集まっている。受講者同士がつながり、学び合うためには、さまざまな経験や

意見を共有し、多様な視点を知ることが大切だと説明された。

多様な視点を知るにはどうしたらよいか。感じていることを語り合い、それを認め合う体験が必要である。しかし、実際には「部屋のなかの象 (Elephant in the room)」と表現される状況になりやすい。示されたイラストには、部屋の中央にいる大きな象が空間の大半を占めて、周りの人が窮屈にしながら目を背けている姿が描かれていた。こうした状況にいる人は、息苦しさを感じながらも、象が怖いので息をひそめている。誰も象の存在に触れない。こんなふう「そこにある」にもかかわらず、「なかったこと」になることを、「部屋のなかの象」という。象が暴れないように、人々はそれを見ようとせず、それについて語らなくなる。こうした現象は、性の問題ではよく起こることだという。

性に対する語りにくさを導入として、ここから米国の TC の一つ、アミティ (Amity) で行われているワークをいくつか紹介していただき、全員で体験した。まず、『一緒に象の絵を描こう』の課題では、受講者が4、5人のチームに分かれ、ホワイトボードに象の絵を描いていく。チームのメンバーは一人ずつペンを手にして、順番に、ファシリテーターが指示した部位だけを描く。例えば、「鼻を描いてください」「次は耳です」など。そうして完成された象の絵を見ると、チームでまったく違う象ができあがっていた。誰もが知っている象を同じ手順で描くだけなのに、メンバーが思い浮かべる象の姿は違っており、部位を集めるだけでは全体像が完成しないのかもしれない。

次に、各人が1枚ずつ配布された紙に『象の絵』を描いてお互いに見せ合うと、これもまた異なる象の姿が現れた。チームで一緒に描く体験とも違う。どちらのワークも正解があるわけではなく、あいまいな課題に最初のうちは戸惑いの表情も見られた。しかし、チームで作業を行うなかで、メンバーとの会話が自然に弾み、答えがないからこそ多様な感想に触れることができたように思う。開始からほどなくして会場の雰囲気やわらぎ、熱気すら感じられるほどだった。

「自分の見方」を分かち合う

象をキーワードにした課題が、さらに続いた。次

は、インド発祥の寓話『盲目の男たちと象』を輪読した。日本では、「群盲象を撫ず」とか「群盲象を評す」ということわざで知られているものである。複数の盲人が初めて出会う象を撫でて、自分の手に触れた部分だけで象について意見を言い合う。ところが、触れている部分が異なるために、象の全体像がちっとも見えないという話である。誰もが自分の知る現実が正しいと思って主張するものの、それは真実の一部でしかない。

読み合わせたあと、「性についての自分の見方について、他の人とわかちあうことで自分の状況をはっきりと理解でき、相手の反応の大切さがわかったという状況」について話し合った。小グループで話し合ったあと、全体のサークルで感想を共有した。次に、その反対に「自分自身についてほかの人に説明しようとしたのに、相手がそれにまったく耳を傾けてくれなかった経験」について小グループで話し合い、全体での共有を行った。最後に、「性に対する解釈や理解が、自分と周囲でまったく異なっていたという意味で『象』であった状況」を挙げていった。

どんなことでも見方は人それぞれ異なるが、お互いにそれを伝えあうことがなければ、そんなあたりまえのことも忘れてしまいがちである。とりわけ性に対する見方は、個人差が大きい。世代やセクシュアリティによっても異なるだろう。自分が撫でた『象』の一部、つまり自分自身の体験や捉え方だけでは認識できないことがある。「相手の反応」は、自分の気づきを深めてくれるものにもなるし、反応次第で関係性を閉ざすものにもなる。お互いの意見の違いを認め合うことが対人関係の基本となる。サークルを体験しながら、対話の重要性が実感できた。

サークルの作りかた

ここから、ワークショップはサークルの基礎の学習に進んだ。

『サークルの基礎 ～物理的・感情的な雰囲気～』というプリントを読み合わせながら、安心して話せるサークルを作るための安全な場について考えた。サークルの基礎となる「物理的な環境」の説明から始められた。サークルは、部屋をきれいにし、人数分の椅子を用意することから始まる。椅子は同じ高さで、同じ



間隔を空けて、円座に並べる。部屋には、ホワイトボードやゴミ箱、どの椅子からも見える飾りがあることが望ましい。中央には、膝よりも低いテーブルを置き、メンバーの視線が遮られることなく、座っているお互いの姿が見えるようにするのがポイントとされた。また、サークルという特別な時間を守るために、その時間は誰にも邪魔されないことも大切である。

こうしたサークルを作るときの物理的な環境設定が、「感情的な雰囲気」を生み出す。感情的な雰囲気は、誰もが幼少期から感じとり、影響を受けてきたものである。人は自分のまわりの感情的な雰囲気に敏感である。幼い子どもに対して、身近なおとなは感情的な雰囲気の「温度」を設定する。子どもにとって、「そこにいたい」と思えたり、「いたくない」と感じたりしたのはそのためである。物理的な環境によって、感情的な雰囲気を感じとることもある。例えば、部屋の飾りつけから「特別なことがある」とわかったり、相手の雰囲気から、感情的な雰囲気を感じたりするときもある。このように、物の見えかたや感じかたから、人々は感情的な手がかりを得ている。

説明のあと、「自分の人生で経験した物理的環境や感情的雰囲気」について考えた。研修では、「性について話したとき」という場面が設定され、性の話題で楽しめたときの物理的な環境がどのようなものであり、なぜ、それを好ましく思えたのかを小グループで話し合った。次に、同じく性について話した場面について、不愉快と感じたとき、うんざりしたり、怯えた

り、寂しいと感じたりしたときの物理的な環境を話し合った。

話し合いのあとに、サークルの適切な人数やサイズに合わせた対話の方法について解説された。一般的には、12人を超えると、親密になったり成長しあう関係づくりをする場になりにくい。大勢のグループの前だと、自分の問題を分かち合うのが難しくなるため、適宜、小グループに分かれるなどして心地よく話せる場にするとうい。また、サークルの最初の経験がすばらしいものになることが重要である。とくに、第一印象は大切であり、ポジティブな体験ができれば、サークルの意味が体験的にも理解される。

質疑では、安全な場づくりとして、物理的空間の工夫のほかに、時間やペースなども重要だという意見が出た。もちろん、時間やペースは参加者に合わせて進めることが大切である。

織り込まれた感情について語り合う

サークルでの最後の課題は、『感情の色合い～私たちのタペストリー～』であった。「この部屋にいる全員が、自分たちの環境の感情的な色合いや雰囲気に影響を及ぼしています」から始まる文章を読み、自分自身の「外側や内側を包んでいる感情のタペストリーの色」を考えるワークである。

さまざまな色の糸が編まれたタペストリー（織物）のように、幼いときから体験してきたいろいろな感情

によって、「私たち」は作られている。色の変わり目、結び目、小さなほころびなど、感情のタペストリーに目を向けると、自分の人生における出来事が見えてくる。目立つ模様もあれば擦り切れた部分もあり、滲んだ色や単調な色もあるかもしれない。「今のような感情のあなたになったのは、何があったからですか？」という問いかけによって、小グループではお互いの人生の体験にわずかながらも触れることができた。

タペストリーは、私たちだれもを「人間」にしていく糸であり、その始まりの糸を辿っていくことで、さまざまな関係性と感情に思いを馳せることができる。自分の感情を探索するワークは、エモーショナルリテラシー〈感識〉と呼べるものであり、性に対する意識や態度に気づく SAR につながる有意義な体験となった。

サークル体験を通して

藤岡氏のファシリテートで進められたサークルは、2時間弱があつという間に感じられた。軽やかに楽しめる課題のなかで洞察が得られたり、深い話をしながらも気持ちが軽くなったり、ワークの構成や流れも工夫されていた。何より、出会ったばかりの受講者がサークルのメンバーとして、〈つながり〉や〈安心〉を感じたというのは驚くべきことであろう。もちろん、研修のテーマである「性と対人関係について語る安全

な場づくり」に関心がある人々は、こうした学びへの動機や準備性も高いといえるが、一人ひとりの考えを大切にするというサークルの理念が安全な学びの場をつくり、集団の凝集性を高めたのだと考えられた。

今回の研修で取り組んだ、性に対する自分の〈感識〉を高めることは、まさに SAR の目的と重なるものである。性的な刺激への反応を理解することも大切だが、自分自身の生い立ちや経験によって編み込まれた感情のタペストリーに気づき、性にまつわる感情がどんなふうに形作られてきたかを理解することから始めるのもよいのではないか。

サークルという安全な場で、お互いに気持ちを分かち合う体験をすることは、これからの性教育を考えるうえでも重要である。性教育や性の支援を行う際には、連携やチームが大切といわれるものの、それが理念的なものにとどまっていたり、連携が単なる分業で終わっていたりすることも少なくない。包括的セクシュアリティ教育の柱である「関係性」とは、子どもに「教える」ものではなく、子ども自身が「体験」しながら学ぶものである。性やセクシュアリティの多様性を知るにも、そもそも人は多様であることが前提にされるべきだろう。

SEE 研修では、引き続き体験を通じた学習と教育や支援の場づくりを行っていく予定である。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】しばらくの間、月～金曜日 11:30～16:30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>